

例会講演要旨

水戸の解体観臓碑について

石島 弘

演者は昭和五十九年八月、水戸市内において発見された碑を解読し、これは斬首刑者を官許を得て解体観臓した碑であることを確かめることができた。碑面の文字はすべてで九十六字で左記の通りである。

寛政十二年庚申四月廿六日盜善次郎  
処斬蓋其為盜三季贓財凡七百余种云  
同人胥議請官解体觀其臟嗚呼惡性之  
人不足言只其筋骨府藏之觀是吾輩善  
師友不能不愀然乃拾取其骨節皮肉竊  
瘞之細谷徳大山妙法寺中薦香花以弔  
其魂云

これにつき若干の考察を加える

一、水戸藩における解体観臓へ西紀一八〇〇年（寛政十二年）に実施されたこと。

二、解体観臓に従事した氏名は目下不明であるか官許により数名の医師によって施行された。

三、医師のヒューマニズムの精神に則り、屍体を提供した死刑囚を師友と仰ぎ、事後鄭重に葬り、慰霊の碑をかねて観臓の事実を後世にのこした。

四、この解体観臓は日本の解剖学史上第二十五番目の挙であることと記録されてよいと思う。

例会講演要旨

越後屋と養生

中西 淳朗

(その一)

『医心方』にある養生という言葉が、我国の一般庶民に、いつ、どの様な形で伝わっていったかという問題を、近世における上方町人の代表で、江戸時代初期に京都と江戸で開店した三井の越後屋をモデルにえらび調査研究した。

越後屋では享保十一年（一七二六）に、具原益軒の『養生訓』を参考にして、健康に関する単行の式目（家法）「養生式」がつけられたが、それまでの時期において、越後屋は養生をどの様に取扱ってきたか。これを第一のテーマとして調査研究した結果、次の様にまとめることができた。

イ、江戸越後屋では開店三年目の延宝三年（一六七五）に、健康注意項目四ヶ条を含む店式目が発せられ、その中に中国医学の柱である灸、薬、鍼をそのまま取入れており、養生と書いている点も注目される。作製者は三井八郎兵衛高利である。

ロ、延宝三年の江戸店式目以降、宝永、正徳、享保の年間に、健康注意の具体的な追加がなされ、それらはみな、高利の息子達

が作製したものである。特に長男の高平は李東垣の『脾胃論』を学んだと推定され、また四男の高平は後藤藤良山の温泉療法を導入し、九男の高久は衛生と家庭医の重視にふれている。

ハ、延宝三年の江戸店式目が発せられてから五十一年目に、貝原益軒の『養生訓』を参考にして、単行式の「養生式」ができたことが判明した。作製者は三井高平。

ニ、越後屋が健康注意に関して、以上の様な先進性を示したにもかかわらず、元禄九年から三十四年間に雇入れた少年二三九名中、約二割の少年が死亡又は病氣退職している。

当時の推定平均寿命二二―二六歳からみれば、やむをえなかつたと思われる。

## 二

第二のテーマとして、江戸時代上方の豪商達が養生・保健をどうみていたか、どの位関心があつたか。この問題を家訓、定書などから調査研究した。

対象として取上げた商家は、伊勢松坂の長谷川家の丹波屋、近江日野の中井家、江戸店持ち京商人の柏屋、伊丹の鴻池家、銅山開発の住友家である。

現在までのところ、断片的な情報しか入手できなかったが、三井の越後屋における養生・保健に関する先進性、具体性を凌駕するものはないと考えられた。

## (その二)

三井の越後屋は、医療又は養生の情報をどこから入手したか、について調査研究をした。ただし享保年間以前の原始記録がない

様であるので、あくまでも推論の域をでないのが残念である。

## 一

初代の三井高利への医学情報の提供或いは教授者は、丹羽正伯の家譜上の祖父・徳翁であろうと考えられた。

その時代は、三井高利の伊勢松坂在任時代の前半期、即ち慶安三年（一六五〇）から延宝元年（一六七三）までの間と推定され、高利は松坂本町に、徳翁は松坂職人町に住んでいる。三井家では丹羽家を親戚と記しているから、数丁以内の距離に住居しているのが当然交際はあつたと考えられる。しかし徳翁の医術・医学のレベルについては不詳である。

天和の頃（一六八〇―一六八三）、三井家と将軍側用人の牧野成貞とをむすびつけたのは、徳翁の長男牛太郎（当時は丹羽家はなれ本因坊第三世道悦と名のる）であつた点からみれば、高利と徳翁の關係は浅からぬものといえよう。

また、三井高利は、後に「商いの本は養生にあり」とのべたが、健康であつてこそ商いができるというような単純な意味ではないと思われる。延宝三年の江戸店式目の中に、養生と記しているところから、高利は正保版『方丈記』の閑居の気味の章第二節の「常にありき、常に働くは養生なるべし。なんぞ徒らに休み居らん」という保健思想に共鳴したのではないか。商人は足を使つて方々に顔をだし、せっせと商いのために働いて富貴となれば理想的だとする高利の理念は、鴨長明の保健思想によって強化されたと考えられる。「商いの本は、常に歩き、常に働くことにあり」と言葉を入れかえてみると、『方丈記』が高利に影響を及ぼした

ことを否定できない。江戸初期の商法、高利の理念、鴨長明の保健思想が一体化したものの、それが「商いの本は養生にあり」という高利の表現であろう。

高利と『方丈記』の出合いも多分、松坂在住時代の前半期であり、正保版を貸したのは丹羽徳翁であるかもしれない。

## 二

三井高利の息子達、特に長男高平はどの様に医学情報入手したのかについては、次の様に考えられた。

三井高平は、元禄十二年に入京してきた香月牛山に、宝永二年までの約六年間の間に李東垣の学説を学んだと考えられる。当時の京都に住んだ後世派の医師で、李東垣を信奉し、町民にわかりやすく医学の話ができる人といえ、まず牛山以外に見当らぬし、牛山開業の高倉通押小路上ル東側は、三井高平の邸から一・五キロの手頃な距離である。

宝永二年、京本店式目に李東垣の医学をもちこんだ三井高平は、その後も牛山に学び、貝原益軒の『願生輯要』又は『養生訓』の講義をうけたと考えられる。漢学の弟子である牛山でなければ、益軒の権病経験を商家向けに選別することが不能であろうと考える。かくて享保十一年に単行式「養生式」が完成した。これも元禄十三年に表向き隠居宣言を高平がしたからで、医学学習に十分時間がとれたと思われる。

## 三

江戸初期から営業した代表的商家である三井の越後屋においては、鴨長明の保健思想を日常生活にとり入れ、また後世派医学の

要点を店式目にもりこみ、さらに単行式の「養生式」を貝原益軒の『養生訓』を下じきとして完成し発令するという先進性を示した。即ち、三井家は江戸中期の大衆向け「重宝記」を土台として保健思想を採用したのではない点が非常に重要で、江戸初期に文字のかける武士から商人に転換した三井家の努力は見のがせないし、上級町人とはいえ、支配をうける商家の中で、前述の様な保健思想が生れていくことに注目する次第である。

追記（その一）は昭和五十九年十一月、（その二）は昭和六十年二月の例会において演述した。